
+純白天使+

熱帯夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

+ 純白天使 +

【Nコード】

N6009C

【作者名】

熱帯夜

【あらすじ】

人間に恋をした純粋な天使リツ。それを見守るツンデレ天使アクリ。+ 天使に惹かれていく多重人格を持つ和輝。また、それを見守る時期マフィアボス清次郎。+++ 彼らの恋が始まります

プロローグ

↓ 落下一時間前 ↓

大きなひつじ雲の上で二人の天子が騒いでいる

「う〜〜〜・・・またあの人が告白されてる・・・」

小さな真つ白な羽をつけて天使は雲と雲の間から下を眺めてそう呟く

「そんなに気になんなら行けばいいじゃん!!」

もう一人の、小さな黒い羽根を持つ天使がイライラしたように白い天使に怒鳴る

それに怯えたように・・・

「だって・・・だって・・・そんなことしたら女神様に怒られちゃうよ・・・」

目に涙を浮かばせ、黒い天使に反論する

それにまた苛つかせ、今度はこぶしを軽く握り何度もぶつける

「リツ!! そんなんだから落ちこぼれ呼ばわりされるんだよ!!」

「だってだって!! アリクちゃんがいつもいじめるから悪いんだよ!!」

「おまつ・・・!! それはお前が」

いつも通りの喧嘩のようなことをして、時間が流れていく

プロローグ2

↓ 落下一時間前 ↓

真つ青な海のような空にひつじ雲が浮かんでいた
その下で・・・

「あ・・・あの・・・付き合ってください！」

一人の少女が一人の少年に勇気の言葉を伝える
だが相手の少年の返事はそっけなく

「あのさ・・・噂とかで聞いてると思うんだけどさ、俺今そーゆー
のに興味ないんだよね。」

今川和輝は頭を掻きながら答える
それでも少女は諦めをせず

「今はダメでも・・・これから振り向いてもらえるよう努力しま
すから・・・。」

「だから今は恋愛には興味ねえんだって！！今は部活とか・・・友
情に真つ直ぐになりたいから・・・。」

やはり和輝の方も引かない
沈黙が続く

五分後

沈黙を破ったのは和輝だった

「俺はお前らには今興味がねえ！ってか目障りなんだよ
休み時間のたびに教室に来ては顔見てキヤーキヤー・・・っバツ
力じゃねえの？」

はつきり本音を言われさすがに傷ついたのだろう、瞳に涙を浮かばせる

「ううう・・・酷い・・・それになんか和輝君いつもと違う・・・
いつもはもつと優しいのに・・・」

「当たり前だ！他人には良い印象持って貰ってたほうが良いに決ま
ってんだろ！？」

少々切れ気味で怒鳴る

それに耐え切れなくなった少女は走りながら

「本性皆にバラしてやるうー

！？」

泣き叫びながら消えていった

雲の上にて

（落下45分前）

雲の上にて……

「あ、ふった……」

泣きじゃくるリツを踏みつけながらアクリは呟く
それにピクつかせ何とかアクリの足から脱出したリツは下を眺める
そしてアクリの言葉を確認して

「よ……よかったあ……」

一瞬泣き止んだかと思ったらまた瞳を潤わせる……ところが

ガスッ

いきなりリツの頭に衝撃が走る
そこには拳を強く突きつけたアクリが

「おいおい……俺を無視して何やってやがんだあ？」

「な……何ってただ……ただ……」

「言い訳無用！」

「ぎつつつ……あああああああ！」

怒鳴りながら手をドリルのように回転させて殴り（？）続ける

そんな時間がまだ続く

「ふうー

」

15分間に続くリツイじめに満足したアクリは、外見には似合わないものを吹かしていた

「ああああ！ アクリちゃんが・・・アクリちゃんがタバコを！
？」

「ちげーよ！ パイポだよ！ ストロベリー味だよ！」

五月蠅いとばかりに言い訳をする
と、言っても嘘はついてないのだが……

「てか俺の事より、自分の事考えろよ！」

「うう……」

先ほどの彼のことを思い出したのか
また泣きそうに俯く

それを見て、ほんの少ししかない良心が騒いでアクリも少しリツの
ために考える

ピンコーン！

アクリの頭に電球が浮かぶ

「わわわっ！ 何かを思いついたようなアクリちゃんだけど、頭に
電球は古い……」

「黙れ！何も言うな！ 俺も今出てきて驚いてんだよ！」

少々頬をピンクに染め、一発リツを殴る

コホン

一度咳払いをし、アクリは語る

「下に行かなきゃいいんだし、とりあえずラウ、レター書いて下に
落とすなりなんなりして告りゃいいんだよ

何こんな単純なことに気がつかんの！？ 自分に泣けてくる・・・」

嘆いているアクリをよそに、リツはポンと手を叩く

「そうか！ その手があったんだ！ ありがとうアクリちゃん！ 早速手紙書いてくるね」

未だに嘆くアクリをよそに、リツはパタパタとどこかに行ってしまった

雲の下にて

↓落下20分前↓

「よう和輝・・・なんだって？」

「何時もんだよ・・・分かるくせに聞くな・・・」

「いやあゝ 何時になったら和輝君の青春は訪れるか気になってさあゝ」

うざいほどの笑顔を向け、（自称和輝の親友）城東院 清次郎が近付いて来る

「大体手前も女いねーだろーが・・・大口叩くな」

「まーいいじゃん？ 結構余裕あるし？・・・つかこの学校はレベルが低い」

他の学校からはかなりレベルが高いといわれるこの秘梓谷高等学校彼の理想はどこまで高いのか・・・

「まあそんなことはどうでもいい・・・早く帰ろっぜー!!」

ニヤニヤした笑顔から輝く笑顔に変えさっさと帰ろっつと鞆を取る

「言い出したのは手前じゃねーか・・・」

ブツブツと呟きながら和輝も鞆を取り、清次郎の後についていった

城東院清次郎とは特にこれといった理由も無く親友と化していった

彼の家は大手の企業を抱えている　いわゆる人生の成功者に分類されるだろう

莫大な財産を持ち、世間に知らないものはたぶん居ないというくらいだ

だが、彼の家には裏がある

この方面でも成功者に入るだろう

彼の家で代々受継いでアメリカに存在するマフィア、キヨリージュ・ファミリーのボスをしている

現在は彼の父がそれを仕切っており近いうちのそれを引退し息子の清次郎に継がせるらしい

まあ彼はまだやる気がないとか何とか言っているが……

「ま、それは今は関係ないか」

「ん？　どした？」

「何でもねえよ……」

2人は肩をならべて学校を後にした

上から下へ

落下1分前

「アクリちゃん、あーん！書けたー！」

「おお
そーかそ
か・・・」

息を切らしながら走って来るリツにアクリはつまらなさそうに微笑む

「はあ……疲れたよう……うう、心の準備が……」

そう言ってぎゅっと手紙を握り締める

彼女の目にはなぜか涙が浮かんでいた

「ややや、やっぱりアタシには無理だよアクリちゃん・・・ どん
な方法でも告白できっこないよお」

「そうか、じゃあ逝け」

ゲシツ

「……ん？ い……やあああああああああ！」

矛盾した言葉と行動を交わしてリツにいきなり蹴りを入れる

「ア、アクリチャ……どーしてええええええええええ！」

「そんな弱気なら直接いつて来い！ 後戻りできないからな！」

まあ、女神にバレルか賭けだな・・・バレル
だろうけど・・・

そんなことを思いながら涙ろ流しながら落ちていくリツに続いてア
クリも後を追った

「ほら、ソコの羽を大胆に！ 暴れるかのように！ お前はしゃぐ
の得意だろ！？」

「それとこれは違う・・・つつっきゃあああああああ！」

バカな事に飛び方を覚えていなかったリツに何とか飛び方を教えよ
うとするが

ない

さすがはバカ

覚えられ

『さすがにこれはヤバい』 と思ったアクリはリツの右手はがっしり掴んで止まろうとする

だが勢いは弱まったものの一向に止まらない

「うぬつつぐ……だあああああああ！」

リツに引っ張られ、アクリも一緒に落ちていった

下に下に

↓落下中↓

「んでよ、アイツあの後なんて言ったと思う？　それがさ……

」

楽しそうに自分に話し掛けてくる清次郎をよそに和輝は空を見上げていた

どうして女子はそんなに恋がしたい？　いいこともあるのか？

自分には分からない疑問を浮かべながら和輝は清次郎と歩いていた

「……なあー、お前俺の話聞いてる？」

「んー？　聞いてない」

「……泣いていい？」

「どうぞ勝手に」

本当に涙を流している清次郎に少々ビビリながらも和輝はまた空を見上げる

見上げた上には白と黒の鳥が落ちてきていた

いいよな、鳥は頭が悪いから変なこと考えずにすん

でよ……

ん？

？トリガオチテキテイル？

『……

ああああああああああああ

！』

二つの声が重なりながら、それは落ちてきたのだった

『どわっ！？』

ドゴゴッ

清次郎と同じ事を言ったと思うと清次郎と同じように地面に頭をぶつけていた

「っいつてゝなんか無駄にでかい鳥が落ち……」

鳥じゃない

ソコには女の子が自分に抱えられていた
清次郎のほうも同じように女の子が顔をうずめている
清次郎も和輝の方に気付いたのか問い掛ける

「・・・この子達何？」

「・・・・・・・・知らん」

「上から落ちてきたよ」

どこかで聞いたような台詞を言い上を見上げる
自分もつられて空を見上げる
いつも道理ののどかな青空だ

「ん？」

何か彼女の背中に違和感があったのかソコを見てみると
羽が生えていた しかも直に

「なんだよ・・・これ・・・」

天使？

愕然の言葉を吐き出していた時

「うつうつ・・・ん・・・」

清次郎に抱えられていた女の子が目を開く

「あれ．．．俺ら．．．」

寝ぼけているように薄く開いた目で回りを見渡す
そこで自分がやっと誰かに抱えられているのに気付く
飛び跳ねるように清次郎の腕から離れる

「わ．．．わりい 重かったな．．．」

「いや全然軽かったんだけど．．．お前ら．．．」

「あああああああ！」

清次郎が言い終るよりも早く黒い天使（？）は白い天使と和輝を交互に見つめる
そして何かを考えたあげく

「確か．．．お前和輝とかいった名前だよな？」

「そうだけど．．．」

「そいつ頼む！」

と、大きな声でわけのわからない頼み事をした後

「清次郎．．．立て」

「へ？」

わけのわからないまま清次郎を起こすと手を引つ張つてどこかへ走
つて行つた

とある豪邸にて

「え……ちよ、ちよい待てよ!」

和輝を無視して走って行く清次郎と黒い天使

残されたのは和輝といまだ気を失っている白い天使の2人でした

「ふ〜ん んで、それを協力してほしいと?」

「お……おう 何とか頼む」

あまり誠意は見られないがアクリは清次郎に頭を下げる

アクリは清次郎を引っ張ってどこかへ行こうとしたのはいいが特に行く当てがなかったので青磁ろうの後をついて行くことにした

今2人がいるのは清次郎の豪華な家でアクリは清次郎に連れられて清次郎の部屋まできた

彼の部屋はほんとに一人部屋かというほどに広く家具や小物までも高価そうなものばかりだった

まあそれは関係ないので・・・

そこでアクリはどうして落ちてきたか、何のために来たかを説明する
そして、清次郎にも何とかリツの事で協力してほしいと頼んでいる
のだった

「いや・・・別に俺は構わないけど」

「ほんとかつ！」

言い終るよりも先にアクリは目を輝かせ清次郎に迫る

あまりにも輝いていたのだろう 清次郎は少々頬を染めて苦笑しながら

「和輝の方がな・・・お前も知ってるみたいだが、アイツは恋に興味は無い それに・・・」

ちら、とアクリを見てからさっき落ちてきたもう一人の天使を思い
出しながら

「お前ら・・・見たまんまのガキじゃん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

そういえばという顔をしてアクリは呆然とする
それに構わず清次郎は

「アイツ、例え気ができたとしても・・・ロリコンじゃないかな
・・・・・・・・」

ハハ、っと苦笑混じりに笑いながら清次郎が言う

リツとアクリの容姿はおとぎ話に出てきてもいいくらい天使に近かった……というか天使だ

アクリは腰まで届くロングヘアにどんな光でも跳ね返すような銀髪だった

肌は雪のように白く、それに合うように海のように透き通った蒼い少々つり上がった目をしている

見た目からしても少し強気な所が見て取れた

リツは少しクセのあるショートヘアをしておりやわらかそうな茶色い髪をしている

こちらも肌は雪のように白く、少々たれた目に蠟燭のようにやわらかい感じをまとった焰の様な紅い色をしている

炎のような紅い目にして正確は弱気で温かい感じが全身から溢れていた

ダメなんじゃねえのか？

そう思いながらアクリは清次郎につられ、苦笑をする

それからしばらくはどちらも言葉を紡ぎださなかった

とあるマンションにて

「どうすんだ……どうすんだ俺!？」

ひとまず白い天使 リツを抱えて清次郎は自宅に帰った
彼の両親は2人ともプロのカメラマンで現在も世界中を飛びまわっている

他に兄弟もない和輝はマンションで一人暮らしをしている
そこは、一人暮らしにしては結構高く、設備も充実していた

「あいつら……この子をどうするつもりなんだよ……ま
あ清次郎はともかく、あの黒い方の奴」

とりあえずリツをソファに寝かし一人考える

何も思いつかない

やはり清次郎に電話してみるか、ということで携帯に電話をかける
しばらく掛かった音楽の後

『もうしもゝし 和輝？ よお元気か？』

何事も無かったように電話に出た清次郎に和輝はいきなり怒りをぶつける

「元氣かじゃねえよ！ 何なのこの子！？ あともう一人のお前つれてった奴！？」

『ああ！ あのここの子？ 天使だってギャハハハハハハハ！』

・・・・・・・・・・うぜえ・・・・・・・・・・

「何で笑ってんだよ！ この子どうしろってんだよ！」

『ああ・・・ひとまず今日はそっちでよろしく そのことについてはまだ明日』

「何勝手に決めてんだよ・・・分かった もう切るぞ・・・・・・・・」

もう切るうとしていた和輝に

『あ！ ちょっとタンマ！』

「なに？」

『襲っちゃダメだぞ！ ギャハハハハハハ』

ブチ

携帯を軽く切った後和輝は少女を見つめる
リツはまだ寝息を立てて幸せそうに眠っていた

お目覚め

うう・・・なんだか周りが真っ白だよ・・・
なんかもやもやしててうごくうごくしてる・・・

・・・ん？

これはゆ・・・め？

ああ、じゃあ起きなきゃ、早くしないとまたアクリちゃんに怒られちゃう

早く、早く

「・・・ん」

まだ目をショボさせてとりあえず起きるリッ
いつもは真っ青な空の上にいるはずなのに・・・

「ううは・・・」

どう見ても見慣れた場所ではない
空の上に存在する建物などはよく見たことがあるが、こんな空間は
何一つとして無いはずだとすれば

「下……人間の……！」

言い終わる前に記憶がよみがえってきた
確か自分はアクリとともに下に落ちて行ったはずだ
地面に衝突する前に2人の人間を見たような気がする
とても印象に残ってる人 その人に合うために
その人間は今川和輝

「!？」

いきなり顔が沸騰したように熱くなる
いや、もしかしたら本当に沸騰しているのかもしれない

もしさつき思い出した自分の記憶が正しければ……それを
推測すればここは

「今川和輝君の……家？」

その言葉を呟いた瞬間、後ろのドアが開いた

「……あ、起きた？」

心配していたように近付いて来る和輝
それによつてリツの顔がさらに沸騰する

「あ！ いや……その……はい……」

それに安心したかのように和輝はにっこりと笑う

「そう それならいいんだ ……ほんとに大丈夫？」

リツの隣に座って顔を覗き込む
リツの顔はこれ異常ないほどに真っ赤だ

「ほ、ほんとに大丈夫です！」

「よかった」

和輝の顔がきらきらと輝く

それに一瞬見とれていたリツが何かを言おうとしたところ

「キミ、天使なんだって？ いや、正確にはキミたちかな？」

「！？」

「さっき聞いたよ もう一人の子、あの子を今預かってる奴に」

「ア、アクリちゃんは無事なんですか！？」

「ん？ ああ、無事だよ んで、本題に入らせてもらっけど、君たちは何の為に来たの？」

「え？ そ、それは……」

少々顔色が戻っていたリツの顔がまた紅く染まる
ごによごによと何かを呟いているようだったが和輝は

「いいづらいんなら、その……アクリちゃんだっけ？ またその子達に合うからその時でいいよ」

「あ、ありがとうございます！」

よ……良かったあー！ やさしい！ やさしいよこの人アクリちゃん！

そんなことを思いながらリツはとても優しい笑顔を和輝に向けた

最初の笑顔

ちつくそ！ マジかわえー！ どうすんだ俺！？

和輝は、白い天使に顔をそ向けて真っ赤になっていた

どーすんだよ俺、これでもロリコンとかそーゆんじやねえぞ！？

頭に大量の疑問を浮かべ、悶える

こんなにも純粹な笑顔を見たことが無いのだろう

彼に向けられる笑顔はいつも具合を伺っているような・・・気を損ねないようになっている笑顔だった

何の裏も無いただ心から笑っているそんな笑顔が眩しかった

もちろん和輝にもこんなにも純粹な笑顔をしたことが無かっただろう

「あ・・・あの・・・」

何かを心配したように白い天使は顔を覗き込もうとしてくる

さつきから頭を抱えてなにやら呟いている和輝が事実だが異常だと思っただろう

「あ、いや、大丈夫だから」

和輝は慌てて笑顔を向ける

もちろんまだ顔は火照っているが・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

そーいやぁ・・・・・・・・

「君、名前なんてーの？」

「え？」

いきなり話題を変えられて自分に投げかけられた言葉に今度はリツは顔を赤に染める

「もう一人の黒い子の方はさっき分かったけど・・・君の名前はまだ知らないから・・・・・・・・」

「あ・・・・・・・・」

もうこれでもかああ！　と、いうくらいに顔を真っ赤に染め、次の言葉を紡ぎ出す

「あ・・・あたしの名前は・・・・・・・・な・・・まえはリツです！」

涙を瞳にいつぱい溜め込み幸せそうに自分の名前を名乗る

それにまた和輝は頬を染め、満面というわけではないが純粋な笑顔を浮かべる

「そっか・・・これからいつまでなるか分かんないけど宜しくね」

「は・・・・・・・・はいっ！」

2人の純粹な笑顔がその部屋だけをとても温かく包み込んだ

朝早くにて

（朝）

「・・・ん・・・」

朝の日差しに眩しく目を細めリツは目を覚ます
昨日は和輝が自分の母親の寢床といつて寝る所を用意してくれた
少し羽の散らかったベッドから身を起こす

「・・・あ・・・・・・」

和輝の事を思い出し、急いでリビングに向かう
リビングのテーブルには朝ごはんとメモが置いてあった

『学校にいつてきます 昼頃に帰る そこのご飯食べといて』

リツは幸せそうな顔をして席に座った

「おはよーさん!」

「おう・・・はよー」

和輝が待っていると清次郎が走りながら挨拶をしてくる
少し待った後清次郎の歩調に合わせ一緒に歩く
最初は黙って歩いていたが、清次郎は何かを思い出し和輝の顔を見ながらニヤニヤしてくる

「！ 何だよキモいな」

顔を不快にさせながら和輝が問う

「いやあゝね 昨日・・・襲っちゃった？」

「はいバイバイ さよなら 今までアリガト」

「わああああ！ ごめん！ ごめんなさい！」

いきなり補足を速め先に行こうとする和輝においつきながら謝る

「フン・・・後ちよつとだからこのまま行くぞ・・・」

「ええゝ！」

そんなこんなで校門に入っていく

早く着たのか、校舎には朝から早い運動部の人たちしか見当たらない

和輝達のクラスは2 - 2で、とりあえず普通のクラスである

まだ誰も着ていない教室で二人は腰をおろし昨日の事について話し

は
じ
め
た

学校 テスト1日目

「おっはよー！」

元気な女子が一人挨拶をしながら和輝達に向かってくる

和輝達は、生徒が何人か来た所で一旦話を中断することにした

「やあやあお2人とも元気？ 僕は元気絶好調だぜヒャッハア！」

この少々ウザイ女、沖田寧夜は、和輝達に素で接してくる、
唯一の女子だ

和輝達も、ウザイと思ったりも時々あるが、基本的に友達と
思っている

寧夜は学年女子で一番の変人・・・いや変態といってもいいだろう
顔立ちは中の中でまあなんともいえない顔だ

そこに寝癖の入った髪型をしていて、女らしさをだらしなくしている
見た目はまだ普通といってもいいだろう

問題は中身だ

中学時代はぶっちゃけ、男も女もOKなバイセクシュアルで女子に
は散々おせっかいを出していた

まあ今もそんなところを時々見るが・・・

その正確プラス腐女子で色んなものに影響を受けたりして口癖や自
称が変わったり・・・

一人で妄想を膨らまし叫んだりもがいたり足掻いたり・・・
色々な人に変な目で見られたり避けられたり

和輝達はそこを承知で彼女と付き合っ
てきている
変なことに振り回されたりもするが……

「にしても今日テストだねー嫌だねー死ねよー」

いきなり話題を変えていやそうな顔をする寧夜
清次郎もそれに共感して

「うわー 勘弁…… でも午前中ってのはよくね？ 2日間だ
けど」

「んまー そこは喜ぶとこだね はよ家帰ってパソコン出来るし・
」

目を輝かせて言うところか彼女らしい
寧夜はさっきから何もしゃべらない和輝を見て

「どーしたカズちゃん 昨日の夜又キすぎでもしたか？」

「でかい声で言うな あと決してそんなんじゃないやねえ 昨日の事思い
出してただけだよ」

「じゃあやっぱり又キ……」

「ちがう！」

大きな声で否定した和輝の調子確かめて寧夜が何かを思い出した
ように言う

「そーだ！ 昨日姉貴に聞いたんだけどさ、おっきな鳥が二匹落ちて来たの知ってる？」

「！？」

その言葉にいきなり両目を見開く和輝と清次郎
それと同時に背中に詰めたい汗がどつと噴きだしたのを感じる

「誰から聞いたの？」

「だから言っただじゃん！ 姉貴だよ！ いつもの空中散歩してた時見たって・・・」

わけのわからない単語が入っていたようだったが和輝達はそれに気付かぬまま深く考える

なんでよりによってこんな厄介なのが知ってたよ！？

「あひゃひゃあひゃひゃ」とくるくる回っているバカを睨みながら和輝が心の中で叫ぶ

清次郎はさっきはびびった様な顔をしていたが今は普通に帰っている

「清次郎！ おま、何でそんなに冷静で

」

キーンコーンカーンコーン

タイミングが良いのか悪いのかチャイムがなって生徒たちが席に慌

てて座る

そこに先生が入ってきて

「HR終わったらすぐ席かえっから！ 必要以上に席から立つなよ」

暢気なことを言いながらHRを始めていった

彼らがまた話せるのはテストが全て終わった後となった

テスト一日目 下校中

「前に言っただでしょ？ 姉貴は天野先輩達の集団の一人だって！」

「忘れた」

「ばええええー！？」

テストが終わったの下校中、周りの人たちは明日もテストがあるという事で鬱になっている

その中で一人、無駄なテンションで謎の声を挙げる女が一人

紛れもなく

寧夜だ

「お前ホントに忘れたの？ 話したこともあるでしょ？ あの外人さん達……」

目を白黒させている寧夜の頭を撫でながら清次郎が言葉を付け足す

「……ああ……あの金髪とか黒い人とか猫の人……」

「カズりん！ 先輩たちのことをそう言うんじゃないありません！」

「分かったからその呼び方はやめろ……」

「そんなことはともかく……昨日の事を話せよ」

どんどん話の逸れていくのに清次郎が呆れながら無理やり戻す

「まあ、かわいい清ちゃんに免じて教えてやろうじゃねえか……」

「アハハ……殺すよ？」

「スイマセン もう言いません」

鋭い清次郎の目に冷や汗を流しながら寧夜が話しだす

「あのね……ここは詳しく話さないよ？ いつも通り空中散歩をしていた姉貴が結構遠くに何かが落ちて来たのが見えたんさ……んで、必死こいて落ちた所に向かってみると誰かさんと、そりゃもうかわいい女の子がいたわけよ……
んでその誰かさんが……」

そう言いながら、ちらと和輝の目を見る

当然その和輝は冷や汗をだらだらを流していた

「はっはーん！ やっぱキミ達だったのか！ いやゝ姉貴の記憶も捨てたモンじゃないよね！」

仕方なく昨日あったことを語った和輝は大量の冷や汗でびしょびしょになっていた

反対に寧夜の方はとても満足をした顔をしていた

「仕方ないよ・・・見られちゃったもんわさ・・・」

「そうだけど・・・こいつにしゃべんのは・・・なんか癪だ・・・」

腕を目に押し付けている和輝に哀れんだ目で清次郎が肩を叩く

「まあまあ、せいちゃ・・・清次郎の言つとおり？ 見られちゃったモンはしゃーないさっ！」

「うるせー！」

目を潤ませる和輝の肩に寧夜の手が気持ちよく置かれる
ヒヤヒヤと声を立て飛行機のように手を広げ一人楽しく和輝達の前を歩いていく

ピタ

ウザかった寧夜の動きがキレイに止まりぐるりと首だけを向ける

「そーいやさ・・・カズ君・・・」

「んあ？」

「その・・・あーリツちゃんにどうやって接したの？」

「・・・・・・・・ああ！」

やべえ・・・・・・・・『女の子に好印象与えるぜモード』
で接してた・・・・・・・・

「いーの？ 決まったわけではなさそうだけど、これから・・・
同居？ すんでしょ？」

顔を真っ青にした和輝にニヤニヤしてしている寧夜
アーアーと言う顔で見ている清次郎

「・・・・・・・・なあ・・・・・・・・俺あどーすりゃいい？」

「「知らん」」

助けを求める和輝に二人同時に顔を逸らす

そんなやりとりをしている間に和輝の家はもうすぐそこまで迫っていた

和輝宅 玄関にて

「ただいま」

先ほどの会話がよほど疲れたのか、ぐったりしたような顔で自宅に踏み入る

それに続いて、楽しそうな顔をしたバカ女と何事も無かったような顔をした親友も続いて上がってくる

「お、おかえりなさい・・・」

とてとと走り寄って来る天使は紛れも無くリツだ
それに続いて

「お・・・ よう帰ってきたな」

飴を咥えながら生意気そうに歩いて寄って来る・・・たしか・・・
アクリとか言う奴だ

で、

「何でお前が勝手に上がりこんでるんだあ！」

「いや」 清次郎の家の人に頼んでここまで送ってくれたんだわ・・・
・でもそんな時こいつ寝てたらいくてな」

こつこつと頭をこずきながら飴を咥えたまましゃべり続ける

かなりテンションをUPさせ、リツ達にはお擦りを繰り出している

「きゃああああっ！？」 「あ・・・あっえっ！？」

かなり摩擦が掛かっているのか頬を真っ赤にさせ涙目になっていく
2人

ブツツチイイイ！！

そこで和輝の怒り爆発

「やめろおお！？ お前が触るといくら純粋なもので汚されて
真っ黒になるわああああ！ くらえっ！ カズパンチ！」

「ぬばがあっ！？」

ネーミングセンスが欠片も感じられないパンチに虚しくも当たって
しまった寧夜が変な声をあげて倒れる

「さ、中に入るぞ どうぞ中へ」

スッキリした和輝の顔に連れられて顔を真っ青にしたリツ達が入っていった

寧夜をゴミ捨て場に置いていき

家に入った後で

「いやあの・・・ホントスイマセン こう・・・かわいい物に目が無いってかなんか・・・萌？」

「黙れ変態 今度やったらマジ殺す」

「安心しろ和輝！ そんなとき俺のウーチ3ミリサブマシンガンが火を噴くぜ！」

土下座する寧夜の前に堂々と座る和輝と清次郎、他天使2人
さげすむように見ている和輝と爽やかな顔でマジなことを言う清次郎に怯えながら謝っている寧夜を他所に2人の天使は会話を進めている

「ほ・・・ホントに帰らなくてもいいの？ アクリちゃん・・・」

「帰りたくてもお前が飛べねえから無理に決まってんじゃない」

「すいません・・・」

堂々とソファに座っているアクリと隅で小さく座っているリツの姿はまさに現在進行している和輝達と寧夜の姿にそっくりだった

「で・・・でも、あの人たちも来るかもしれないんでしょ？」

「あ、それはたぶん大丈夫 キース達はすでに俺の配下だ 悪くて

見に来るだけだろ・・・」

「あはは・・・じゃあ、ミントちゃんやケイナちゃんが来るかも」

「奴等にちゃんなど付けなくてもいい　まあアイツ等は来てもお前苛めるだけだからそれはいいい」

「ええ！？」

「嘘だよ・・・そんな時は和輝達も何とかしてくれんだろ・・・」

そう言つて和輝達を見る

和輝達はまだ寧夜に何かを言っているようで寧夜の顔はかなり青ざめている

その姿が少しリツと重なって哀れに思ったか、アクリが話を本題にしようと口を開く

「なあ・・・もういいからさっさと本題に入ろうぜ　時間が惜しい」

和輝達はアクリとリツを見たあと、また寧夜に目を移す

彼女は冷や汗をたっぷりとかき、なんかもう吐きそうな顔をしている

「仕方ねえ　わかった　本題に入ろう」

そうして本題に入っていく

ロビーで 5人の会話

「ふゝん じゃあ、単に足を滑らして落ちてきたんだな？」

「お、おう 偶然落ちてきたただだ」

主に和輝とアクリが会話を進めていき、つまらなそうに話を聞いている清次郎と目を輝かせて聞いている寧夜と申し訳なさそうな顔をしているリツで話は進んでいつている

「じゃあお前ら帰れないのか？」

「さつきも言ったとおり、このバカのおかげで俺は行けてもこいつが行けん 追いてつてやれっか・・・」

少し恥ずかしそうな顔で最後の言葉を小さく呟く隣でニヤニヤしている清次郎には平手打ちを繰り返していたが

「他に帰れる方法は？」

「ちょっとした奴等が見に来るかもしれんが・・・奴等にそれ程の力は持っていない」

「使えない奴等だな」 「御もつとも」

訝しげな表情をしている和輝にリツが口を開き

「ああ！ で、でもサンジェルマンさんが来るかもしれません！」

突然話し出したリツに目を向け和輝が問う

「誰だそれ？」

「上にいる唯一の男性です！ 普段はあまり顔を出しませんが、
とても優しいんですよ！」

・
・

こんなかわいい子を独り占めとはうザイ奴だ・

和輝のサンジェルマンへの好運度ダウン
そこにアクリも口をはさみ

「でも優しいのはほぼお前だけじゃねえか・・・ そりゃ他の子に
も優しいが・・・ なんか違う」

和輝のサンジェルマンへの好運度更にダウン
あまり良いイメージが湧かないそのサンジェルマンという男に和輝
は苛立っていく
ソレを気にせずアクリは

「でも・・・ 約束とか決まり後と破った奴にや結構厳しいよな」

「そういえば・・・ この前もミントちゃんがあの人に関連して行か
れて戻ってきた時、大泣きしてやつれてたもんね」

そこにさっきまで全然しゃべっていなかった清次郎が話しに混ざる

「じゃあお前ら・・・ おしまいだな」

「いーーーーーやーーーーー!!」

「バカッ! そんなこと言っなっ!」

いきなり泣き出したリツを見て和輝が清次郎の頭を叩く
リツの隣ではアクリが顔を青ざめて何かブツブツと呟いている

「あああ! 悪い悪い! 安心しろ! そんなとき俺等が守ってやつさ!」

「・・・お前等なんかに・・・あんな奴手におえるか・・・ハハハ」

アクリが青ざめたまま笑いながら涙を流している

「まあ、ソレはこれから考えることにしようや」

話をそらせようとする清次郎に寧夜もさっきまで閉じていた口を開く

「そーだよ 下にも怖いモンはいんだからさ ほら、結構前からこの辺うろついてる通り魔とか、目の前にだつてマフィアがいるし・・言つちやお終いだけど、こんな女だつて居るんだしさ・・・」

それから思い出したのかまた口を開き

「学校にも居んじゃん あの眼鏡とか、中学の頃あれやこれやの噂の人とか・・・」

思い当たる節を他にもどんどん話していく寧夜に4人の顔が青ざめていく

「そーだな・・・ 危険なのは上だけじゃないんだよな・・・・・」

「ううう・・・ 怖いですね・・・」

青ざめた顔で呟いている和輝と涙を目にためて苦笑いをしているリツ他2名を気にせずに寧夜は淡々と言葉を紡いでいった

玄関と帰り道

「ほんじゃ皆のものバイバーイ」

「じゃあ、また明日」

「じゃあな」

あれから会話を盛り上げようとして色々と話していたらかなりの時間たっていた

「おう、じゃあ明日」

「さ、さよなら・・・」

リツやアクリの世話の話にもなったのだが、立候補したのがあの寧夜で誰もがその後を想像できたので、とりあえず今日道理にすることにした

「あー！」

いきなり何かを思い出したような顔をする寧夜
その後いきなり和輝の家に戻り

「ふきや ああああ!？」

リツの背中を覗く

「ん何すんだよ!？」

「何って 身体検査？」

「死ね」

寧夜の後ろには今にも打ち出しそうに銃を構えている清次郎が居た

「質問されたこと以外答えるな・・・ ホントに身体検査か？」

「YES！」

「なにゆえ？」

「んゝと・・・ どうなってんのかなゝというただの興味と、天野さん達に頼まれて」

『天野』と言う単語に首をかしげるリツとアクリだったが和輝達も目を見合わせ首をかしげていた

「何で兄貴たちがそんなこと聞くんだよ？」

「禁止事項デシヤベレマセン それじゃ、サラバだ！」

そういつて寧夜は猛スピードで下に下りていった
その後すぐに和輝が清次郎に

「なんで天野先輩たちがそんなこと聞くんた？」

「俺に聞くな・・・ 明日聞けばいいだろ？」

そう答えながら清次郎はマシニングの安全バーを付けている
ソレを見て目を細めた和輝が

「・・・なんでお前そんなモン持ってたんだよ」

「レオの兄貴から頂いた アシユレの兄貴からも頂いたんだがな？
こっちの方がじっくり来るんだよ」

「・・・さいですか・・・」

「じゃ、俺帰っから」

「ん・・・」

そう言って下に行った後、いつの間にか下に居たりムジンにアクリ
を乗せ、帰っていった

狭い帰り道の中に一つだけ白い光が光っている
指で構っていることからして携帯だろうか

「あ、もしもうし？ 僕っすー」

遠くからの車の音しなかった道にすんだ良い声を通る

「あの子達の事なんだけど・・・うん、そーそーそれぞれー」

会話の内容はさっきまで一緒にいた天使たちの事らしい

「なんかねー 先輩たちの思っていたのとはやっぱ違うみたいー
・んー 分かりやしたー じゃあまた明日」
・

「お休みなさい 姉貴」

そう言って寧夜は携帯をしまいながらニツコリと、微笑んだ

テスト2日目

「うえー・・・ 今日もまたテストだよー」

「良いじゃねえか また早く帰れんだしさ」

朝、机に伏せてうめき声をあげている清次郎に和輝は、資料集を読みながら答える
その光景を羨ましそうに眺める清次郎は

「何でお前そんなの読めるんだよ・・・ Mですか？」

「死ね 俺はNだ」

「・・・ 笑い取ろうとした？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

笑い出そうとした清次郎に和輝は必死に止める

「おぼば・・・ だつてお前・・・ おま」

「何も言つな何も！」

その時、清次郎の口を抑えていた和輝達にやけにテンションの高い声が掛かる

「はあーい！　そこのお2人さんお元気い？」

「……また厄介のが来た……」

元気に手を振る寧夜を見て和輝は疲れたようにため息をついた

てすてすてすてすてす

学校にチャイムが響き渡る

「あゝ 終わったねゝ さつさと帰ろゝ」

「ちょおおおっとまっただあぁあ！」

開放感に満たされて帰ろうとしていた清次郎に寧夜の声が掛かる

「んなんだよ！ 俺はさつさと帰ってアクリとゲームの続きがだなぁ！」

「知ってるから！ そんな事知ってるからとりあえず聞け！」

ギャーギャーと騒いですみで和輝が「何で知ってんだよ………」と、呟くが2人の耳には入っていない

とりあえず話は聞こうということで清次郎は折れ、寧夜の話を聞く事となった

「……といっても、僕が話すんじゃないんだけどな……」

「じゃあ帰る」

「イヤン！バカン！ ちょっと待ってえ！」

「キモイは！ ひっぱんな！」

そこで寧夜は窓側に走って行き上を向いて、3階に叫ぶ

「レオのカツオ野郎おおおおおおおおおお！」

その声はとても通っていてとてもでかかった

ソレを聞いた清次郎は顔を真っ青にして

「・・・おまつ！？ そんなこと言ったら殺されっ・・・・・・・・」

和輝が言い終わる前に教室のドアが勢いよく開けられた

そこに立っていたのは顔を真っ赤にして怒りに満ちていて・・・
金髪碧眼でなぜかバンダナを着けている男子生徒だった

放課後の教室

「んだあゝれえゝがあゝ・・・ カツオじゃこのカスがああああ
あ！！」

その少年は、そう言うが早い。清次郎と同型のウーチmmサブマシンガンとUZIサブマシンガンを両手に抱えいきなり寧夜に向けて発砲しだした。

「ワオ！ この前よりすごいね！」

関心の言葉を漏らした瞬間寧夜はそのまま窓から落ちるように出、身を隠して銃弾を防ぐ。

そんな事も気にせず銃弾の嵐は止まない。

この現状を見て、焦る和輝。

「おいおいおいおい！ 何なんだよあの先輩！？ あと寧夜の奴も！？」

「え？ 単なるちよつと危ない先輩と変人女だけだけど？」

清次郎はもうこの光景を何回も見ているのか、平然と彼等を見ながら和輝の質問に答える。

ちなみに清次郎がこの前言っていたウーチ3ミリ（略）は、この先輩から頂いた物である。

「いやー あの機関銃良いんだよ 普通のより軽いし 弾換えもも

う慣れたし・・・」

「そんな事を聞いてんじゃねえ！！ 大体なんであんなに怒ってんだよ！？ カツオがそんなに嫌いなのか？」

「魚とかじゃないんだよあれ・・・ イタリア語で言うとな
って意味になるんだよ 知ってる人は辛いねえ」

・・・あー あの先輩可哀想 あんなでかい声で叫ば
れたらなあ・・・

和輝が哀れんだ目を向けていると機関銃を撃っていた勢いが止まっ
た どうやら弾切れのようだ

銃弾が向かっていた先には壁と窓があり、壁はいくつもの穴を開け
て未だに煙を噴いており、窓ガラスはキレイさっぱり割られていた

「・・・どーすんだコレ？」

「安心しろ・・・ちゃんと俺が弁償する」

和輝の質問に答えたのはあの悲惨な壁と窓を作った本人である

「・・・つくそあのアマめ・・・で素は違う奴だろうが・・・
・・・今度2人まとめてぶっ殺す」

怒りをあらわにした表情をする
だがその時

「フッフッフ・・・ そんな事はさせないよー！」

気の弾む声をした方向を見るとそこにはセーラー服を着た寧夜がM3短機関銃を持って立っていた

「見ろ！？ この完璧なコスプレを！ この銃探すの大変だったんだからね！ 着替えるのも大変だったんだからね！ あ！ どうやって着替えたかは聞かないで！」

そう言った途端、寧夜は先ほど自分に撃ってきた少年に標準を合わせ、

引き金を押した

「快感・・・」

寧夜がそう言った後には教室中に銃弾の跡がしっかりと残っていた

蜂の巣の教室で

「んでさー おかしいと思わない？ 題では機関銃なんだよ？ の
クセに使ってるのは短機関銃・・・
コレっておかしくない？ 詐欺じゃない？ だから解いて？」

「どーでも良い豆知識ありがとう・・・ だが縄は解かん」

縄で縛られた寧夜の周りには3人の男子生徒が囲んでいる
和輝、清次郎、金髪でバンダナを巻いた西洋人（先輩）
寧夜の頭には先ほどの機関銃の銃口を向けた金髪少年が恐ろしい形
相を浮かべて立っている

「さーこれからお前をどーする？ 今この状況じゃお前を助ける奴
なんかいないし 泣き叫んだって無駄無駄」

「・・・この変態め」

怪しい笑みを浮かべている少年に寧夜はボソリと呟く
そんな時

『うにやうにやははあゝん 僕はイゝ又ゝりネゝコ派ゝな
のゝ ぼよよおゝん』

意味不明のなぜか人をむかつかせる音楽が寧夜のポケットから流れ
てくる

「おお！ この着信は姉貴！」

「なっ!？」

気付くが早い、寧夜はスルリといとも簡単に縄を解く
いわゆる縄抜けをやって見せた

それに驚く彼等を他所に寧夜は携帯に耳を近づける

「あ、もししゝ？ 姉貴？ うん、僕僕ゝ 今ねゝ姉貴の教えてもらった呼びかたしたら怒って出て来たよ？ そうそう！ いやゝおもしろい人ね」

どうやら例の姉貴からの電話のようだ
タイミングが良すぎる

和輝達はそんな寧夜を見ていたが、隣の少年は何か嫌な予感を察しているのか、冷や汗をかいている

「え？ うんワカタ ホイ先輩」

「. やっぱりか」

寧夜の差し出した携帯をしぶしぶと受けとる

「替わったぞ . . . ああ お前よくもあんな事を ん？ な なんでソレを」

会話をするにどんどんと青ざめていく

「っだど！ やめろ！ それだけは勘弁 はあ？ 分かった そうするよ」

そう言い終わると携帯を閉じて寧夜に渡しながら

「不本意だが、とりあえずお前を許す事にした　今度覚えとけよ？
奴と一緒に蜂の巣にする・・・」

そう言うと和輝達に目を向ける

寧夜を見ていた呆れ顔から打って変わって真剣な目つきに変わる

「まあ知ってるかと思うが改めて自己紹介だ・・・　俺の名前は天
野レオ　早速本題なんだが・・・
お前等の家にいる・・・その・・・なんだ・・・・・・天使と
か言う奴を俺等に預けてくれないか？」

「え？」

清次郎は知っていたようで平然としていたが、和輝は呆然として言
葉を漏らす

蜂の巣の教室で 2

「ど．．．どという事ですか．．．先輩」

睨むような目つきでレオを睨む

だがレオは愛想笑を浮かべて

「いやいや 別に変な事考えてるわけじゃねえんだ ただな．．．
確かめただけなんだ」

そこで深刻そうな顔をする

「その子達が俺等と同じ存在なのか．．．ただ．．．ただ確かめ
ただけなんだ」

彼の辛そうな表情を見て、和輝はしばらく黙り込む

隣にはずっと何も口に出さず話を聞いている清次郎と、離れた所に
寧夜が携帯をずっと構っているこちらの話を聞いているかは分から
ない

ソレを気にせずレオは淡々と話していく

「人間と天使．．．．．そういうのじゃないんだ、俺等が知りた
いの．．．．．だが詳しくはしゃべれない あまりこっちにも
関わりを持ってもらっちゃ困るし、きつとそっちも迷惑する お前
等は俺等とは違う だから．．．だから！」

強く拳を握り締めたあとに大きな声で叫ぶ

「頼む！ その子を．．．その子達を俺等に預からしてくれ！！」

「！？」

頭を下げるレオに和輝は戸惑い清次郎に助けを求めるかのように視線を移す

清次郎はいたって冷静で和輝に答える

「俺はお前に任せると先にレオの兄貴．．．先輩に言っている 後はお前しだいだ」

そう言い目を閉じる

和輝が再び視線をレオに移すとレオは既に顔を上げていた

「返事はまだいい．．．考える時間は誰だって欲しいだろ．．．
．．．いきなりこんなこと言って悪かったな」

そう言って教室を後にする

「あ．．．．．」

何の言葉をかければよかったのか分からなかったのか、静かにその先輩を見送る事しかできなかった

蜂の巣の教室で 2（後書き）

多分・・・レオ先輩（達）の事情は書きません
また違う話で書くか・・・

あるいはリアルの方でのみ、書くかもしれませんが
応募する予定も少々あり・・・

まあ、どうも、スイマセンでした

2階廊下で

カツカツと靴の音を廊下に響かせ、天野レオは3階に向けて廊下を歩いていった

だがその後を追うものが一人

「…… い……先 い……先輩！ オイ！カツオ
！！」

「誰がカツオじゃゴるああ！！」

大きな声で変な呼び方をしてくる後輩に血管を浮かべながら振り向く
立ち止まるレオに追いついたのは間違いもなく寧夜だ
息を切らせており、ととのつてから口を開く

「だって、全然振り向いてくれないんだもん！ そりゃ例の呼び方
だってするよ」

「うるせえ 振り向く気分じゃなかったんだよ！ そんな事より何
のようだよ？」

「な！ 何打はこっちの台詞さ！ 何であたしが姉貴に頼まれてあ
の子達調べたのに……どーして施設に預けようなんてするの！？」

寧夜の問いに言葉を詰まらせ、少し黙ってから、口を開く
その表情は、先ほど和輝に見していた表情になっていた

「お前の言葉だけじゃ信じられない・・・ 例えアイツの・・・
アイツの妹分だとしても・・・ お前だって俺たちとは違う！ だ
からちゃんと自分たちで確かめたいんだよ！」

「そんなこと言ってホントは認めたくないだけでしょ？ 少しでも
希望を持ちたいんでしょ？ 自分たちと同じ存在だって信じたいだ
けでしょ！？」

また寧夜の言葉に押し黙ってしまうレオ
悲しい顔をして寧夜は話し続ける

「あの子達は先輩達とは違う存在だよ・・・ 先輩達とは何の関係
もない・・・ だから・・・ 彼等の好きにしてあげて？」

哀れむような顔をしてレオを真剣に見つめる
彼女の顔にはいつもの明るさは欠片もなく消え去っていた
そんな彼女にレオは

「・・・分かった・・・ とりあえずもう関わりは持た
ない だが・・・ もしもの時は」

「了解」

口の端を少し吊り上げて返事をする寧夜を見て、レオのほうも口が
笑う

「・・・サンキュな もしかしたら、あいつ等を苦しめてたかもし
れない あいつ等には今の話はなかったことにしてくれって言っ
てくれ」

「・・・まったく・・・世話のやける先輩だね」

「お前もな・・・ ホントアイツとそっくりだ」

お互いまだ影は残ってはいるが、口がほころぶのを確認して、自分たちの居場所へ戻ろうとする
そんなレオの背中にポンと手で軽く叩いた寧夜が

「いいもんねー 本望だもんねー」

舌を出しながら走って行った

「ただいま」

「お帰り 何だつて？」

3階のとある教室で窓際の席に座っている少年が振り向かずにレオの帰りを迎える
レオはまだ少しやるせなさを顔に残し

「とりあえずやめる事にするよ ホント、お前の言ったとおりだ」

「……………だろ？」

少年はまだ窓の外を見つめており、レオのほうを振り向く様子はない

「そっぴゃ、バカ2人……って、1人はたいてい見当がつくけど」

「……………コミケとゲーセン」

短くレオの問いに答える

「何でここに居させなかったんだよ……？」

「それは……ん？」

先ほどまで窓の方を向いていた顔がゆっくりとこちらを振り向く

黒いクセのあるような髪型をして整った顔立ちでレオのほうを向く
目は珍しい金のような目をしていて、蛇のような細長い瞳孔でレオを
見ながら口を開き

「その例の子達って……もしかしてあの子達？」

そう言つて窓の外にまた顔を向ける

その鋭い目線の先には

白いロングの子と茶色のショートの子供が2人いて
背中に羽らしき物を生やしていた

2階廊下で（後書き）

・・・もう一度言いますけど・・・
レオ君たちの事情は多分こちらの話にはあまり出てきません
スイマセンホント・・・

窓の外を覗いて（前書き）

『イソノカツオ』

分かった人います????

「私は男性器です」

と言う意味です

下ネタですごめんなさい

ちなみにカツオは男性器と言う意味をもっています

下ネタでごめんなさい

窓の外を覗いて

校門の前にいる羽を生やした2人の少女

それはまさしく、先ほどまで自分が和輝達に預からせてくれと頼んでいたリツとアクリだった

「何であの2人が・・・!？」

とりあえず彼女達に会おうと下に行こうとしたレオに

「待て」

レオを引き止めるがその顔はまだ窓の外を向いたままだ
レオは振り返り、目の前にいる少年に反論する
そして、そこではじめて彼の名前を口にする

「つんで止めるんだ！ アシュレ！」

名前を呼ばれた男は振り返り、レオを見据える

その目はとても鋭く、ただレオ1人だけを見つめ続けている

彼 天野アシュレはレオの質問に淡々とした口調で答える

「お前が行ったところで何になる？ 和輝・・・あいつ等に聞いてダメだったのに、今度は直接本人に勧誘を申し込むのか？ いい加減諦める ま、いい加減つつても、そんなにしつこくはしてないがな」

口に嘲笑を浮かべながらレオのしようとしていた事を口に出す
それに反論しようとしたレオだが、返す言葉が見つからなかったの
か、下を向いて黙りこくる

アシュレは下を向いて黙るレオを見て、ため息をつき

「ま、諦めろ 話を変えて申し訳ないんだが・・・」

そう言いながらレオを指さし

「その・・・背中何だ？」

レオの背中には『イソノカツオ』とかいてある張り紙が張ってあった
それに気付いたレオは顔を真っ赤にし、さっきまでと打って変わっ
てテンションを上げ

「あのクソアマアーーーー！！」

そう言って張り紙を勢いよく破った

「ねえ あの子達ってリツちゃんとアクリちゃんだよね?」

窓の外を見ていた寧夜は校門の前にいる2人の天使に気付き、和輝達に問いかける
清次郎もそれに気付き

「ホントだ あれアクリじゃん」

と、言いながらアクリに向かって手を振る

「和輝ー お前の大好きなリツちゃんが……って……
……いやしねえ」

「清ちゃん清ちゃん こっちに居るよー 走ってる」

「んあ?」

寧夜の目線の先には校門に向かって一目散に走っている影が見えた

「ありやりや ありやもう溺愛だね モーレツラブだね ロリコンだね」

そう言いながら、寧夜は自分と和輝の鞆を持って廊下に出て行った
残った清次郎は

「・・・そんな事よりつてのもなんだが・・・この教室どう
なんのよ・・・」

ため息まじりにそう呟き、鞆を担ぎ職員室の方へ歩いていった

窓の外を覗いて（後書き）

『イソノカツオ』

分かった人います????

「私は男性器です」

と言う意味です

下ネタですごめんなさい

ちなみにカツオは男性器と言う意味をもっています

下ネタでごめんなさい

校門の前にて

「あ、ありがとうございますっ！」

校門の前には、リツとアクリがワゴンで売っているパンを買っているところだった

ここのパンはなかなかの味で、特に菓子パンを重視しており、女子高生に人気である

男子生徒にもなかなかの評判なのだが、昼休み、下校時間では女子生徒が戦争を繰り広げており、その中に入るものはほとんどいない

その中でも、かなり勇気のあるものしか食べないクリームパンをリツは買っていた

かなり甘いだけあり、白く食欲をそそるクリームが、パンの隙間から所々顔を出している

「・・・お前、よくそんな見ただけで甘そーなの食うよなあ・・・」

「えー！　だって美味しそうなんだもん！」

アクリの方は、なかなか人気の高いクロワッサンを買っていた

こちらは程よい甘さに、何重にも重ねられたパンの生地がサクサク感を限界まで出しておりとても美味しいと評判である

今日は午前だけあって、パンを買って帰っていく者もあれば、友達とどこかで食べようと、何人かで帰って行く者が多く居り、パンは余裕で買えた

「それにしても和輝君達遅いねえ」

「俺に聞くな 何なら中まで見に行けば？」

「ええー！」

口一杯にクリームを含みながら、リツが顔を赤くする
そんな時、

「なあーうんーでえーっこんな所にいつ！？」

目にもとまらぬ速さで和輝が走ってきた
よく見ればその後ろの校舎の2階、なぜか知らないが穴がいくつもあいている教室に清次郎と寧夜の姿も見える

「なんで・・・アクリはともかくリツちゃんがここにっ？」

「ともかくって何だよともかくって・・・」とブツブツ呟いている
アクリを他所に、リツが顔を真っ赤にしたまま

「あっあのっ・・・おおお遅かったから・・・気になって・・・」

クリームが溢れそうなくらいにパンを握り締めて戸惑いながら和輝の問いに答える

・・・つんで、良い子なんだよこの子はあつ！？

やばいつ！ 俺マジやバイかも！！

口を抑えてリツ達に背を向けている和輝の顔は真っ赤になっている
リツの方はどうしたのかと焦りながら和輝を見ている

その光景をみている寧夜はニヤニヤと嫌な笑みを浮かべていたのだ
が・・・

「へえーい！ そののかわいこちゃんたちい？ げんきしてるう？」

大きく手を振りながら、鞆を2つ持った寧夜と、疲れたような顔を
した清次郎が歩いて来る

「和輝ーお前、カワイ子ちゃん達に早く会いたいの分かるけどウ
チに鞆持たせんのやめてくんない？」

「和輝ーお前、この子達に早く会いたいの分かるけどさー、無責
任にあの教室放置すんなよ・・・ 先公共に、説明すんの大変だっ
たんだぞ？ まあ、兄貴たちが責任とってくれるつつから少しは
楽だったんだけどよ・・・」

そして、2人息ぴったりに

「このロリコンが」

と、和輝に投げかけた

帰り道

「なっなんだよロリコンてっ!？」

和輝は清次郎と寧夜に言われた言葉に顔を赤くする
その隅では、

「ね〜アクリちゃん ロリコンってなあに？」

「それはね、ちっちゃ・・・」

「ああああ!!言っ言っ言っ!!」

更に顔を赤くして少女等の会話を阻止する

周りの人等が和輝の事を変な目で見ていた時、リツは思い出したように、

「あ・・・あの・・・おか・・・えりなさいっ!」

その言葉を聞いて和輝はまだ顔を赤らめながらも調子を取り戻し、

「た・・・ただいま」

戸惑うように、頭を掻きながらそう返事を返すのだった

「おっちゃん！ 今日いくつパン残ってる？」

「今日は・・・いつもの3倍ほどかな・・・」

「OK！ じゃあ、いつもんくらいで！」

「ハイ、3千円ね」

パンを売っているワゴンの運転手、おっちゃんと呼ばれている男と仲がよいのか、寧夜はいつもの調子でそのおっちゃんという男と会話をしていた

向こうも寧夜の態度に慣れているようで、常連のように扱っていた袋一杯にパンを入れ、その中から1つ、リツの食べていると同じクリームパンを取り出して頼張る

「あゝ やっぱコレ甘いわぁ・・・ リツちゃんこれよく平気で食べるね」

「え！ 美味しいですけど・・・不味いですか？」

「そーゆー意味じゃないけど・・・あ、和輝んたぁも食う？」

「俺貰って良い？ 一番でかいフランスくれ」

「あいよ」

そう言いながら、清次郎にフランスパンを丸ごと手渡す
それを見ていたアクリは

「そ、そんなの食えるのか？」

「おお、楽勝楽勝・・・もしかして心配してくれたの？」

「べ、別にそんなんじゃないぞ！」

あからさまに目をそむけて反論する

ツンデレ属性かつ！？

その光景を見ていた寧夜は真剣にこう思ったのだった

そして帰り道を歩く

「いやゝだからさ、あそこの小学校の子があまりにも可愛くって・
えへ、写真一杯撮っちゃった」

「……お前、よく捕まんないよな……」

「うふ、ロリコンのアンちゃんには言われたくなか」

「……どの言葉だよ……」

和輝は寧夜の変態話につき合わせており、前には清次郎と天使2人が普通の楽しい話をしている

その光景を和輝は羨ましそうに眺めていた

「……やっぱりリツちゃんと話したいのね？」

「は？」

寧夜の顔を見ると彼女は、口を手をあて「うふふ」と言いながらニヤニヤと笑っていた

その後和輝の方をポンと叩き、

「悪い悪い　なんかもう、いとおしそうにリツちゃんを見ている和輝がいかにもキモくてねそれで・・・」

「お前はまた訳の分からん事を・・・」

拳を硬く握ってみせる和輝に「ご免ご免」と寧夜が即座に謝る

「じゃ、僕もう行くわ　バイババイ」

「お前、そっちじゃねえだろ？」

駆け足に走っていかうとする寧夜に和輝が問い掛けると、女の子らしい表情をして寧夜が振り返った

まるで、好きな人を待っているような顔をして
そして、彼女の口が開き、和輝に答えを返す

「さっき言ってた子！　丁度この時間あっちの道通るんだ！」

顔をピンク色に染めながら、リツ達にも別れの挨拶をしながら、小走りで走っていった

「・・・あの変態め」

額に血管を浮かばせながら、和輝は寧夜の背中を見送った

変態が去った後の帰り道

「あ、なんとなくだけどコレあげるね！ 明日の朝食には丁度いいでしょ？」

「ん？ いいの？ じゃあ貰っとく」

と、簡単な言葉を交わして寧夜から貰ったパンを抱え、寧夜と別れた後、4人は無言で歩いていった

そして、丁度分かれ道で別れようとしていた時、

「そうだ・・・なあ和輝、まだ時間あるし、ウチ寄ってかね？」

「何だよ？」

「ほら、あれだよあれ 昨日今日はすぐ帰れたから良かったけど、これからは夕方までウチに帰れんぜ？ だから、そのリツちゃんをウチに預けるとかさ・・・ウチなら、結構人居るし」

確かに清次郎の家には二十四時間必ず誰か5人は家・・・屋敷に居る和輝はしばし考えた後、

「・・・お願いするよ でもおまえんちって親父さんの仕事仲間が」

一番重要で心配な事を聞こうとした瞬間、

「いるよ」

「おい！ 大丈夫なんかそれで!？」

あっさりとした清次郎の言葉に戸惑う和輝をなだめるように清次郎が言葉を続ける

「いやゝ結構アクリは連中と仲良くやってんだぜ? ……まあなかにはちよつとマニアックな奴が居るけど……… 安心しろ! みんな優しいし良くしてくれるよ お前の事も結構気に入ってるようだしな」

気になる言葉があつたのだが、和輝はそこには触れない事にし、清次郎の言葉とその表情に安堵する

……だがやっぱり例の言葉が気になる

「その……マニアックつつつのは……?」

「そりゃあ、やっぱり……」

そして和輝が予想していた言葉
同時に聞きたくなかった
言葉が紡がれる

「ロリコンとか……何とか属性萌えって奴だろ? あの調子じゃきつと天然系……妹属性萌えの奴もいるよ、絶対!」

きつぱりと肯定した清次郎の答えに、和輝は心の中で叫びをあげた

ああああ！！！！！！！！！！

お前んとこの住人はああああああああああ

清次郎宅にて

「ただいま」

どこぞの学園かと思えるくらい大きな門をくぐり、これまたどこぞの貴族の庭と思わせる庭を通って行き、和輝達は清次郎に連れられて屋敷に入った

「「「お帰りなさいませ、清次郎様」」」

屋敷の入った瞬間待ち構えていたのは、家政婦か・・・またはメイドと呼ばれる女性が立っていた

おいおい！！　こんな奴相手に『様』って・・・

何度来ても慣れないその光景を見ながら和輝は何度も心で叫んでいる言葉を心で叫ぶ
リツも門に入ったときから目を丸くしていたが、更に目を丸くしている

「「「アクリ様もお帰りなさいませ　お友達の方々、どうぞごゆっくり」」」

「あ・・・はい　そうさせて頂きます」

そう言いながらそこを通り過ぎていく
リツは完全に思考が固まったようで足だけ動いており、目が見開かれているままだ

ここまでは普通じゃないが、清次郎は普通の豪華な屋敷の坊ちゃんとして見られただろう

彼らが現れるまでは

「おう 坊ちゃんお帰りかい？ アクリの嬢ちゃんもお帰り」

「友達まで居るじゃんよ ゆっくりしてけな」

「てか・・・和輝じゃね？」

「ホントじゃんよ じゃあそこに居るカワイ子ちゃんは？」

しばらくの沈黙

・・・

だがその空気も一瞬にして弾け、

「オオオオイ！！ 和輝つおまつ・・・坊ちゃんと同じか！？ 同
じなのか！？」

「何でお前等だけつくソオ・・・」

「ウゼエ、坊ちゃんはともかく、お前まで」

全く訳のわからないことを口走っている部下たちの姿を無言で通り過ぎ、清次郎は自分の部屋へと案内した

「やあよく来てくれたね諸君！ 今日はずつくりとゆったりとのんびりと贅沢に寛ぎたまえ！ 寛ぐがいい！！」

大げさな事を言いながら自分の部屋を開く

「・・・・・・・・えっ！？」

その部屋にも驚いたのだが、その部屋の中に居る人物に和輝は驚いた

「あ、清次郎坊ちゃん！ お帰りなさい」

キャプキャピと透き通るような弾むような声をあげてそこに居たのは1人のメイドだった

その姿に口を開けて呆けている和輝とリツを置いて、清次郎とアクリはズカズカと部屋の中に入っていく

「どーしたんだ和輝？ リツちゃんも早く入りな」

そう言つて清次郎は和輝達を中に押し込め扉を閉めるとりあえず正気に戻った和輝であつたが、その隣ではまだリツがぽかんと口開けて固まっていた

和輝の方は何度も清次郎の家に訪れ、清次郎の部屋にも入っているが和輝が先ほど驚いたのは和輝の部屋ではなく、

そこに居るキャピキャピとしたメイドだった

とある女子高生達の会話

これはとある女子高生の会話の一部

「ねえねえ」

「ん？ 何だい？」

「昨日更新された例のWebラジオ聴いた？」

「あつアレ？ 聴いた聴いたー いやゝ今回もなかなかのものでした」

「あたしやつぱあのコーナー好き 身の回りの愚痴のやつ」

「んゝ・・・ なんかむかつく時もあるけど共感できるもんね 聞いてウザイと思うたりするし」

「だけどあの愚痴が・・・」

「そこが面白かったりするんだよね 後からスッキリする」

「あたしも 人の話し聞いててアレほどスッキリする事はないよ」

「他のコーナーも面白いし、楽しいし」

「あたしあの自作の小説の朗読好きだよー」

「アレは続きが気になるね」

「でもアレって2人でやってるんでしょ？」

「よくあんだけの声が出るね」

「自分等で七色の声と言っちゃってるし」

「否定はしないんだけどね」

「しゃべり方とかも可愛いね」

「でもアレって・・・萌えとかそういう声なんじゃないの？」

「・・・そこは人それぞれだね」

「なんかキャピキャピしてるよね」

「あ、そついや2人の画像見たことある？」

「え！？ 見れるの？」

「実は時間限定で更新されてたんだよ」

「どんな子だった？」

「先輩の方は、髪が紫で目に星が入ってた」

「ワオ！」

「後輩の方は、髪が赤で目にハートが入ってた」

「・・・名前どうりだね」

「ぶどう先輩といちごちゃん？」

「そ、それ」

「まあ楽しいからいいじゃん？」

「確かに」

「あの『スウィーティーラジオ』!!」

清次郎宅 部屋にて（前書き）

……… すいません。

もうホントスイマセン。

旅に出ていました調子こいてました四次元をエンジョイしていました

修行のたびに出たいたことにしてください…

描き方少し変わります

本当にゴメンナサイ

これから頑張っていきます

清次郎宅 部屋にて

ぶどうといちご。

スィーティーラジオ。

一見アホそうでくだらなさそうな名前のこのラジオ番組。

だが、男女差別なく、幅広い年齢層から支持を受けているこのラジオ番組を和樹は知らない筈もなかった。

「な、なんでこんな所にあのいちごって奴が居るんだよ……!?!」

「あれ、和樹お前知ってたの？ 意外だな」

「あっちの方が意外すぎじゃボケエ!!」

「あっはは」

「で、どうしてあんな子がいるんだよ」

「まあそれは後に語るとして……コーヒーでも飲みな？」

「……………」

話題のいちごといい彼女に運ばれたコーヒを啜りながら、和樹は改めて彼女を観察する。

現在は何も知らないリツとアクリと共にテレビに向かってゲームをしている。

通常より大きいテレビからは激しい音が聞こえてくることから、格闘か何かの勝負モノだと分かる。

慣れないゲームと向き合い、ひっさにボタン操作を頑張っているリツに一瞬和まされるが、和樹は我に返り、改めて彼女を観察する。

見た目から年齢は和樹達と同じくらい。

髪は桃色で染めているかツラを被っており、横から赤いリボンで縛った長い髪が両方から垂れている。

目の色も髪と同じで桃：もう少し濃いピンクでこれはカラコンを入れていることが分かる。

顔立ちは日本人で、結果コスプレ少女との結論が出た。

「……………もう一度聞いてやる。あのこは何だ？」

血管の浮かんだ拳を見せながら、和輝は清次郎に問い掛ける。

「あの子はね、ウチのアルバイトさん」

「はあ？」

「だから、お金貯めたい。バイトしたい。時給良いトコ。金持ちん
トコ。ココ。バイト。メイド。OK？ 理解した？」

「…微妙なところだ」

「あらず」

清次郎は静かにコーヒー口を啜る。

和輝はそれを見て、リツ達の方に目を向けながら再びコーヒーの
カップを口に運んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6009c/>

+純白天使+

2010年12月14日16時21分発行